

国立東京療養所にて

一粒の芥種

——マタイ伝13章31節——

『愛泉』誌第13号、1957年7月28日発行より転載

1956年10月28日

小池辰雄

天国の音ずれ 奇蹟でなく天的必然 神の愛の中 原始力的生命

【マタイ13】

31 また他の譬たとえを示して言いたもう 『天国は一粒の芥種からしだねのごとし、人これを取りてその畑に播まくときは、万の種よろずより小さけれど、育ちては他の野菜よりも大きく、樹きとなりて、空の鳥きたり其の枝に宿るほどなり』

●天国の音ずれ

マタイ伝13章の31節に、キリストはここに天国の音ずれを語られた。イエスの伝道の第一信は、

「汝くいあらたら悔改あらためよ、天国は近づきたり」

でした。誰でも知っている聖言みことばです。けれども、これを本当に受けとることが生涯の課題です。キリスト教は決して常識ではない。安易に卒業したらだめです。限りなく掘つんでゆかねばだめです。はかり知れない深さです。山上の垂訓ついでも、

「幸さいわいなるかな霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

で始まっています。この二つの聖言が一切であると言ってもよいのです。

「天国とは何ぞや」

ということになります。

「人の生くるはパンのみによるに非ず、神の口より出づる凡ことばての言ことばによる」

キリストの第一の糧かては神の言でした。聖書は神の言の大海です。海辺に出て単純の偉大さに打たれました。金波銀波を見ながら、私は目をあげて祈っていました。浜千鳥が波にたわむれていました。浪と朝のたわむれをしている小鳥。大いなる海と小さい浜千鳥、なんとという対照でありましょう。単純な偉大さ、海の濤なみの音、誠に地球の呼吸であるように。地球が呼吸をしているようです。世は移りゆくが大海は昨日も今日も千変万化しつつ変わらざるものです。神の言も愛も千変万化して現まわれています。捕ほ捉そくし難いが根本は実まことに、ある一つの一貫したものを以て貫かれています。キリストの言もたくさんありますが、一



言に帰するなら「天国」となります。私は、

「幸なるかな霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

という言が、あるとき解けました。そのとき聖書のもつれがスーツとつけてゆきました。

●奇蹟でなく天的必然

さて、今日の箇所、

「天国は一粒の芥種の如し」

キリストの言はどこまでも事実を告白していらつしやる。キリストは我らに教えておられるのでなく、やむにやまれず——小鳥がやむにやまれずさえずり、波がやむにやまれず波打っているように——やむにやまれず告白していたもう。ゲートルもドストイエフスキーもダンテもまた日本の万葉の世界もみな本当の意味では告白であるように、聖書は告白なのです。

「天国は一粒の芥種の如し」

とはキリストがそうであり給うたから、そう言われた。私は鍵をそこに見出した。聖書はその現実の中におのれを投じこまねばわからない。認識でわかる世界ではない。認識では周辺をグルグルまわるだけ。聖書は全身を投じねばわからない。皆さんと共にこの一句の中に入ってゆこう。

芥種とはパレスチナの方々にある雑草。黒や白があり、小さい十字花植物、菜の花のようなものだそうです。大きくなると3メートルか5メートルになるが、小鳥が巣を造るほどといったも過言ではないらしく、とにかく種子の中で最も小さい種子から大きくなるので、これを掴まえて言われたのです。イエスは自然のいろいろのものを掴まえて語られました。あるときは一本の小さい百合——本当はアネモネだそうです——の花をみて神の栄光を直視し、また葡萄をみれば生命の実相を把握されて告白されたように。いま、芥種を見て言われたのです。マルコ伝4章の30節〜32節、ルカ伝13章の18節〜21節にもあります。マタイ伝17章の14節〜30節に、

「もし芥種一粒ほどの信仰あらば、この山に『ここよりかしこに移れ』とい
うも移らん。かくて汝ら能わぬ事なかるべし」

と。まあ驚いた聖言です。いかなる学者も科学者もこんなイエスの聖言に太刀打ちできません。イエスという方は何というお方だろう。あまりに次元の違うお方だったから、言い逆らいをうけて十字架につけられてしまわれた。人の罪の極致の十字架が逆に人を救う恩恵とは、しかし何たることでしょう。十字架を見てはじめて真の悔改めがおこるのです。

内障眼、てんかん、ぜんそく、がん、など現代医学の課題となる難病がたくさんあります。またその他によこしまなるサタンの勢力が横行し、正しいことが枉げられていますが、キリストには、



「なし能わざる事なし」

と。神の意志と法則に従ってゆくと自由に自由があります。そしてそこに人の目に奇蹟と見えることが起きますが、これは奇蹟ではなく天的必然なのです。キリストは奇蹟をなししているのではない。当たり前前のことをしておられるだけです。神の意志と法則に従ってあられたのみです。

この世には、物理的真理よりも、もつと驚くべき法則があります。神の意志だからです。人間は単に物理法則で動いているわけではありません。人間の生活はそれ以上のもので支配されています。一番根本の法則の法則となつてゐることは神の意志です。信じると信じないに関わらず人間はその下におかれています。ただし、神の意志の法則に従うところに自由がある。所謂、自由意志ではありません。

エラスムスが自由意志を唱えたに対してルッターは奴隷意志論を以て戦いました。人間主体的に考えると、エラスムスに真理ありと思われます。けれども、人間意志は神の意志の中に投げ出されたときに、はるかに素晴らしい神における自由が発動する。これが「クリスチャンの自由」であるとルッターはいいました。これが福音の世界です。イエスは、

「我自ら何をなし能わず」

と言われました。これが彼の生涯を貫いています。我らも「主の祈り」がお題目では何にもなりません。

「汝の意志をならしめ給え」

という祈りは、己の意志を放擲せねばなりません。その時、汝なる神の意志が我を通して成ってゆくのです。神は具体的なキリストを通し御自分の栄光を現わし給う。キリストはまた我らを通し神のみ栄えを現わさんとしておられます。

●神の愛の中

日本人は素晴らしい智慧をもちながら、何故神の愛の中に入らないか。神の愛の中に、智慧の中に入らねばだめです。そうでなければ、日本はもう真の前進をなし得ません。キリストの霊を受けるとき、日本刀よりはるかに素晴らしい光を発揮できるのに、偉大なる神を受けぬ限り真の果はみのりません。

この一つの絶対、唯一の歴史の導き手、完成者なる超絶の神、また我らの中に内住し給うキリストに日本人が突入せねばだめです。太平洋をわが庭の池としながら、何故日本人は小さいか？ 太平洋よりはるかに素晴らしい絶大の神です。

地球は宇宙からみれば芥種より小さい。その中にある人間、何たる微々たるものでしょう。芥種よりもつと小さい。しかし我々は本当に芥種になるか否か。姿が小さいだけではだめです。芥種に何が宿るか？

「芥種一粒ほどの信仰あらばこの山に、海に入れといわれたら従えます」



と応える。信仰は大きく熱く強くなりたいと思う。勿論結構です。けれども、そういう念願はどういう角度から受けとるべきか、これが大切です。

イエスは芥種を御覧になりました。そこにある外観は小さい生命力、量的には小さいが、質的に物凄いものをもっている。信仰が強いか熱いかは、量ではなく質にかかっている。それがイエスの信仰でした。信仰はとにかく量的になりがちですが。

では、質的とはどういうことか。ルカ伝10章の25節〜27節で、永遠の生命をつぐ為には何をなすべきかのところで、

「汝心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして……」

とある如く、「尽くし」は「一切」という意、「一切を傾けて」という意。聖書は人間の構造を「霊」と「心」と「体」の三要素一体と考えています。

「霊も心も体も一切をあげて全的に」

ということとです。全く神の前に自分を投じてゆくゆき方が極めて大切なのです。

いまの若い人はとかく分裂症的ではないでしょうか。個々には美しいものをもっていないが分裂し、相剋そうこくしているからだめです。我々の日常生活そのものを信仰となし、全力を傾注して神を愛し信じてゆく。そうすると愛と信とは一つになります。信仰と望と愛。三相一如です。而して一言でいうなら愛というよりしかたがないのです。愛という言葉で表現される三相一如です。パウロはコリント前書13章で、

「信仰と希望と愛と三つのものは限りなく残らん。しかし其のうち最も大なるは愛なり」

と書いていますが、パウロはそれを、

「愛の中に一切が含まれている」

と書いてくれてよかったです。だから、

「芥種一粒ほどの信仰あらば」

とは、

「一粒には驚くべき生命が内在しているから」

ということに突き抜けると思うのです。量でなく、

「一粒の芥種の如く小さいが全的に凝集されたものであれ」

ということとです。ぼけてとってはいけない。信仰が大きいとか小さいとかではない。芥種の中に全生命力が宿っている如く、結晶したような質をもっているか否かが問題です。それが、

「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして」

です。



●原始力的生命

キリストは12才の時、ヨセフもマリヤも眼中になきが如くエルサレム神殿におられました。両親が、

「兎よ、何故かかる事を我らになせしぞ」

と訊^{たず}ねたとき、

「お父さんの事に従っているのに」

と訳した方がいい位です。

「お父さんの事に従っているのに、肉のお父さんお母さんは……」

と言われたキリストは、実は最大の親孝行であられた。天父の愛を受けて縦の線が立つと、横の線に愛は流れてゆきます。

唯一人、神とだけ全的に結ばれるとき、横も素晴らしく展開してゆく。このイエスの徹底さに打たれなければ、キリストの言はひびきません。

イエスを迎えたというなら、この霊のキリストをこの我らという神の神殿の中に迎え奉^{まつ}り、このキリストの愛に燃えて全力を尽くし愛し奉ることです。芥種の実質は何であるか、エネルギーは何であるか。霊のキリストであり、キリストの愛の生命です。我らはこの小さい器にマリヤが、

「汝のみこころの如く我になれかし」

と言ったように、キリストの前に己を投げ出し、霊を宿すとき、真の芥種となれるのです。イエスは神の霊を宿した真の芥種であり給うたから、世の末までも地の極^{はて}までもその枝葉をはり給う。この一粒の信の実体となるなら、み旨により、この山に移れというときは移るのです。

我々は「ズレ」を来たして置いてだめな人間ですが、必ず成ると信じてゆかねばだめです。現実には我らは罪びとだから成らなくとも、

「神は必ずならしめ給う」

と信じ念願してゆくなら成ってゆく。破れとズレは次第々々に少なくなつてゆくでしょう。我々銘々が芥種の一粒となつてぶつかつてゆけば、必ず天国は展開してゆく。キリストの霊核を宿すとき、芽はふき、枝はのびざるを得ない。

これを伝道というのです。生活そのものをもつて、病める人、悩める人を助けざるを得なくされる。人々に生命を植えてあげずにいられない者とされてゆく。これが、

「天国は芥種の如し」

のところです。驚くべき大きな展開をしてゆく、霊の生命力が我らを通しはたらきたもう。

このようにして我らが芥種一粒の信が何であるかを知るとき、所謂、自分の信などぶつとんでゆく。イエス・キリストを宿すこと、化体することです。キリストの言でなくキリストという言が化体するのです。



「我が言は靈なり生命なり」

キリストが靈なり生命だから、その発する聖言が靈なり生命なりなのです。キリストの言とキリストを別々に考えたらだめです。キリストの中に入ってしまふとき、キリストが告白して下さる。キリストという驚くべき原始力によって化体されると、恐ろしいものは何もなくなります。これが真の現実というもの、天国というものです。

パウロをよめばパウロとなり、ヨハネをよめばヨハネとなります。それは同じ根源、靈から来ているからです。

この生命の中に全的に飛び込もう。飛び込むとは皆さんが自分で飛び込むより他に仕方がない。福音をいい加減なとり方をする人は御勝手。しかし、飛び込んだら素晴らしい世界です。何か生きが違ってきます。何処がちがうか。キリストの生命があるからです。

来年はこの芥種一粒の原始力的生命をもつてグングンと生き動き且つ伸びてゆきましよう。

